壁画 ART で太平洋をつなぐ

～　Producer's Story　～

Oceania village 実行委員会
共同委員長 野崎伸治

前代未聞となった東京 020 オリンピック・パラリンピック

当初、オリンピック関係者の方から、この「Oceania village」プロジェクトについて、プロデュース依頼を頂いたのは、2019 年秋頃でした。Oceania village とは、国際オリンピック委員会オセアニア部門委員会(略称：ONOC)が管轄する、太平洋島嶼国 15 ヶ国・2 自治領を合わせた 17 カ国によるオセアニア地域連合パートナーハウスです。
パートナーハウスとは、オリンピック・パラリンピックに参加する国や、各国オリンピック委員会及びパラリンピック委員会、その他の団体が、国の文化や観光 PR、市民や選手、要人の交流、メディアへの発信、各種イベントを開催するプロジェクトです。
　既に「東京 2020 オリンピック・パラリンピックまであと○日!!」と都内各所、全国でも街頭カウントダウンをしており、私は東京オリンピック・パラリンピックに関われる「誇りと責任」、そして今まで太平洋に関する活動を通じて、お世話になった方々、それを紡

いでくれた先人の方々、島嶼国の友人たち、日本にいる太平洋の仲間たち。様々なご縁を振り返りました。大きな覚悟と少しの恩返しが出来ればという想いでした。
そして、東京 2020 オリンピック・パラリンピックにおいて「日本と太平洋の絆を世界に伝える」というビジョンを掲げ、一般社団法人太平洋協会と ONOC は、Oceania village 推進協業契約を締結致しました。

街頭カウントダウンを眺めては、焦る気持ち抑えながら企画策定に奔走

私たちは「Oceania Village の会場となる東京竹芝から世界へ、太平洋と日本の絆を発信しよう!私たちは海で繋がる Pacific Family !」と使命感を持って意気込んでおりました。初期企画は、東京竹芝広場という海に面した心地よい会場、アクセス利便性や立地条件を最大限に活かして、広場中央に櫓(ヤグラ)を組んだステージで連日行われる太平洋の夏祭り。太平洋と日本のアーティストによる音楽 Live やダンス、壁画 ART や映像パフォーマンス。各国アスリートによる、フラッグセレモニーと競技デモンストレーション。子供たち参加型ステージと交流、文化体験教育。各国ブースでは、大使館協力による文化紹介や物販エリア、飲食部門ではパシフィック・ビアガーデンと太平洋特産品フード。そして選手を応援するパブリックビューイングなど。２週間に渡って開催される盛大な「太平洋夏フェス」を予定しておりました。

企画を振り返るだけでも尋常ではない熱量ですが、それらは私の相方であり同志、共同プロデューサーの佐藤航と共に歩んできた「Pacific Roots Project」という礎があります。「音楽とアートで太平洋をつなぐ」Pacific Roots Project は、太平洋コンピレーション CD アルバムが人気シリーズ（Vol.5 まで）となり、太平洋に関する様々なアート活動。2014 年からは 3 カ年に渡って大型野外フェス「Pacific Roots FEST」、その後「Pacific Roots in Palau」、「島サミット併催イベント太平洋島まつり」など、今までの数多くのイベント・プロデュースの経験値がありました。その為、累計収容人数 20 万〜30 万人程度なら運営できるという、経験に基づく実現可能な範囲で最大限の挑戦を企画策定していました。

Oceania village のプロジェクト設計後、早々と関係各所に企画提案の為、プレゼンテーションで廻る日々。Oceania Village 実行委員会の発足とチーム運営、東京都や会場調整や予算調達の苦労、準備期間のスケジューリング設計など、プロデュースにおける全てを呑み込んで、「日本と太平洋をつなぐ」という目標に向かって、日々邁進しておりました。

大きな挑戦が遠い過去に変わった、新型コロナウイルス感染拡大

新型コロナウイルス感染拡大によって、プロジェクトが徐々に侵食されていく。2020 年 4 月には第一次緊急事態宣言となり、やがて東京 2020 オリンピック・パラリンピックは延期決定へ。私はプロジェクト責任者として、常にコロナ禍での大型イベント催行による感染拡大リスク対策と熱中症対策、食中毒やテロ対策、プロジェクト運営における全てのリスクオペレーションなど。コロナによって引き起こされる様々な問題課題に直面していました。正直、これは不誠実なのかも知れませんが、2020 年度の大会延期によって、時間的猶予が出来た際は、安堵がありました。しかし、積み上げた企画を全て一旦バラさなければいけないという、喪失感も混じっていました。

やがて、2021 年を迎え、コロナ禍で非日常だった筈の生活は、いつしか日常へと変わり、コロナ対策とオリンピックへの世論、その風もいつしか壁になりました。その壁によって政治家たちの本質が露呈され、コロナ対策への政治的リーダーシップ欠如、組織委員会と民意の意識格差、時代錯誤な失言による辞任や、肥大化した予算問題、マスメディアと SNS の差異など、度重なる様々なネガティブ要素によって、新型コロナウイルスは個人間における価値観を隔てるものとなり、大会開催そのものが不透明になりました。

「本当に東京オリンピックは開催できるのか?中止にすべきではないのか?」

オリンピックを人生の目標として目指してきた世界中のアスリートが抱えてきた苦悩と葛藤は、私たちの想像を超えるものだったと思います。そのアスリートを支える家族や関係者、全ての人々が「先の見えない不安とコロナ」に自問自答されたと思います。
私自身も、この慢性的な苦悩と葛藤は直前まで続きました。この苦悩は乗り越えるのではなく、付き添うものとして受け入れ、自分なりに前向きに努めていましたが、現場の企画再設計は簡単ではありませんでした。何故なら、コロナ感染拡大の状況によって全てが流動的になり、まるで波打ち際の砂浜でジェンガを組むような、不安定な状況下で積み上げては、外的要因でまた崩れる。そもそもオリンピックは開催されるのか?という疑念の繰り返しでした。何度も何度でも、新たな企画策定をしては、崩れていくという無常な日々でした。

プロジェクト方針を再設計。立ち止まる勇気、道をひらく。

結果、当初の大規模なイベント企画は全て解体し、プロジェクト方針から再設計しました。 そして、コロナ禍による全てのリスクを算出した上で、流動的で限られた時間に併

せて企画を逆算する事にしました。一般客を集めた大型フェスではなく、関係者によるセレモニーのみ開催へ。音楽アートなどの全てのコンテンツは、リアル×オンライン配信でのハイブリット型へなど。企画自体が大幅に変わる為、予算調達の問題も生じました。スポンサー集めは状況的にも出来なくなり、規模縮小の中で何をすべきか?しかし、果たして何か出来るのか?コロナ感染拡大によって、ずっと道は見えないままでした。
その間、東京オリンピック開催への不透明感と懐疑心が高まり、世論の反対意見は、まるでひび割れした地面から溢れてくるマグマの様に、憤りと失望が連鎖して、不安と不信が膨張していました。ある意味、私個人もその一人だったと思います。
行き場の無い虚無感に追われ、迫り来る時間に追われるなか、霧かかった見えないゴールに走るというのは、リーダーとしての無力感に囚われます。何度も企画策定していた縮小計画も、コロナ情勢によって二転三転どころではない程、転がり続けました。その度に心が折れ無いように努め続けるのは、まさに人生修行でした。

だからこそ私には立ち止まる勇気が必要でした。不安を払拭する為に、不信を振り払う為に必死になることを止めました。より自然体に、自分と対峙しながら、過去と現在の放物線にある未来を想像しました。そして私たちの太平洋への想い「日本と太平洋をつなぐ」という、その本来の志を道としました。そして、壁画 ART に今までの全てを込めよう。私は決断しました。

「 壁画 ART で日本と太平洋をつなぐ 」

壁画 ART は私たちと共に歩んできたアーティスト壁画画家 Kensuke Takahashi 氏に託しました。壁画は「海は私たちを繋ぐもの」をコンセプトにしました。東京竹芝の第二待合ターミナル「光庭」には、白いイルカのオブジェが並んでいます。それは東京諸島の象徴だと、お世話になった竹芝港湾施設の方から教わりました。その東京諸島の象徴であるイルカとの調和、そして私たちの普遍的な責任「SDGs14 番(海の豊かさを 守ろう)」を背景に「雄大なカメ」を 3 日間に渡って素晴らしい画力で描き上げてくれました。

これからの日本と太平洋の未来へ

太古から亀は良縁を運び、長寿をもたらす縁起物といわれています。新型コロナウイルス感染拡大によって世界中で日常が失われ、誰もが心を失いそうになる時があると思います。そんな時には太平洋の海を泳ぐカメように、自然と共に、ゆっくりでもしっかりと前進することで、世界に明るい未来が訪れることを願います。
そして、日本と太平洋は海で繋がっています。太平洋島嶼国は、各国政府が迅速なコロナ対策と施し、国境を閉鎖しました。その決断力に伴う成果もあり、世界的に稀な感染被害

が殆どありません。しかし、観光業を始めとする産業は壊滅的であり、医療体制や物流インフラが脆弱な島嶼国は、コロナ後において、大きな課題を抱えております。
東京 2020 オリンピック・パラリンピックを終えて、私たちは「日本と太平洋をつなぐ」新しい未来を築きたいと志を掲げております。この壁画で描かれた太平洋の雄大なカメが、その一つの旗印になれば幸いです。そして、いつの日か人々の幸せを運んでくれることを願います。そう想いを込めて、この Oceania Village プロジェクトを壁画 ART として残しました。

Oceania village の壁画 ART は、東京 2020 オリンピック開幕からパラリンピック閉幕まで、作品展示期間としておりました。しかし、本当に残念ながら。東京都は新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言延長となった為、大々的なプロモーションや宣伝活動など、自粛を決断いたしました。本来であれば、展示期間中に沢山の来場者を迎えて、太平洋島嶼国への興味を持って頂きたかったのですが、展示会場である東京竹芝及びフェリー乗り場は「東京の島」伊豆諸島・小笠原諸島への玄関口である為、渡航による会場施設利用の方など、限定公開とさせて頂きました。苦渋の「自粛決断」でした。
せっかく描いた壁画 ART を会場で多くの人に見てもらうことが出来ない。沢山の方々に見てもらいたい！しかし、人を集めてはいけない。最後まで矛盾に苦しみながら、雄大な亀は 9 月 5 日に展示期日を終えて、去っていきます。まるで自然の摂理のような。壁画 ART は、何もなかったかのように無くなります。これも諸行無常です。

「早く中止しておけば良かったのに・・・」そんな声は周囲の誰よりも自分が持っていました。日々毎日、自問自答を繰り返しながら、いつでも諦めるのは簡単でした。しかし、この Oceania village プロジェクトを通じて、感染者を一人も出さない手段方法で、これからの「時代に挑戦」しなくてはいけないと常に考えていました。そして、逆境でも未来に向けて希望を抱くことが大切だと。私は心に刻みました。いつか次世代の子供たちに、この想いを紡ぐときには、自分たちも先人から学び、日本と太平洋のご縁と「絆」を継いできたこと。今を生きる私たちの「志」を伝えたいと思います。

「日本と太平洋をつなぐ」未来への挑戦は続きます。

一般社団法人 太平洋協会
企画委員長 野崎伸治

Oceania village 実行委員会 共同委員長
Pacific Roots Project Co-Producer
nozaki@pia.or.jp

Project Concept

海は私たちを隔てるのではなく

私たちを繋ぐもの

新型コロナによって閉ざされた国境でも

私たちの絆は繋がっている

太平洋の友好と世界の平和に願いをこめて

ひとつの太平洋

Pacific Family